1パーティー（南会津）

〈期　間〉　七月二十一日～八月四日

〈メンバー構成〉

P・L　岡本　隆裕（T3）　野田　秀彦（E1）
S・L　白川洋一郎（E3）　樋口　敏夫（T1）
S・L　次田　育義（T3）　田中　均一（T1）
金井　雅仁（T2）　斎藤　裕（T1）
平中　俊行（M2）　小林　次郎（T1）
杉崎　公俊（T1）　向井　孝彰（T1）

〈企画と準備〉

四月中旬に年間活動方針のもと、夏合宿各パーティメンバー編成がなされた後、数回のパーティミーティングを重ね、夏合宿地が論議され、最後迄、南会津と南アルプスが出ていたが、議論の末、南会津に決定した。それは一次トレ合宿の時であった。つぎにコースも選定され、安越又川から窓明山へとっつき、ブッシュをこいで駒ケ岳迄行き、檜枝岐から帝釈山系並びに燧ケ岳を経て奥只見湖へ向うという事になった。

さっそく五月中旬迄に関連各大学W・V部、営林署、村役場、バス会社等へ問い合せを出した。パーティミーティングでこの合宿地について詳しく調べ、話し合い、パーティの山行レベルの増強に努めた。六月に入って第一次下見隊として、PLが直接現地調査に行き、安越又林道より西沢。東沢並びに窓明迄のブッシュ、舟岐川等の調査を実際に行なった。これと問い合せの返事の内容から、前半のブッシュは苦しいが、必ず成功するとの自信を深め、その他全体的にほぼ原案通り最終決定し、同時に事故対策を考え始めた。

トレーニング合宿も全て完了し、途中で退部した者一名を除き一年は七名全員が参加できることになり、二年二名、三年三名、合せて十二名のパーティとなった。予備合宿で遭難対策訓練も無事終了。同時に食料計画、装備の準備も終り、いよいよ七月十八日の出発式を迎えた。

〈予定コース〉

七月二十一日　新大阪[illegible]東京[illegible]上野[illegible]
二十二日　[illegible]会津若松[illegible]会津田島──小立岩──林道終点T・S
二十三日　T・S──西沢──二股──窓明山──最低鞍部T・S
二十四日　T・S──三岩岳──最低鞍部TS

二十五日　T・S――駒ケ岳――大津岐峠――槍枝岐TS
二十六日　T・S――舟岐川――越ノ沢――稜線T・S
二十七日　T・S――帝釈山手前峻部T・S（半日休養）
二十八日　T・S↔田代山ピストン（半日休養）
二十九日　T・S――黒岩山――赤岩清水T・S
三十日　T・S――長蔵小屋――燧ケ岳――御池T・S
三十一日　T・S――燧裏林道――只見川――尾瀬口――銀山平――中荒沢T・S

八月一日　予備日
二日　〃
三日　〃　予備企画
四日　解散　平ケ岳ピストン

コースタイムと日誌

七月二十一日

〈コースタイム〉　十八時十五分新大阪――二十二時二十五分東京二十三時五十分発

〈日誌〉　やはり新大阪からの出発は不正解か？新幹線の居心地良さに反比例して見送りの少なかった事。こだまの自由席に落ち着いてようやくこれから夏合宿突入だという感じがして来た。

七月二十二日　雨後曇

〈コースタイム〉　五時三十二分会津若松着――七時三十六分会津田島着――八時十五分会津田島発――九時四十五分小立岩着――十二時二十分林道終点十九時就寝

〈日誌〉　上野からばんだい五号の一隅に乗り移り若松から田島へ。そして幸運にも十二人だけ？の為に出たがらすき臨時バスに乗って九・四五ようやく小立岩着。本部へTELしたがなかなかつながらない。ようやくのことで第一声。「皆元気だ」「そうか」。デポ隊の次田と平中は小立岩で降りず、そのままカンロと共に槍枝岐に向った。林道終点でさっそくテン張り、同時に、白川と金井に西沢偵察に行ってもらう。一五・〇〇すぎに歌を歌っている所へ、デポ隊がくたくたになって到着。一六・三〇には偵察隊も帰る。やがて雨が降り出したが、合宿唯一のスキ焼きをたらふく味わって皆満足顔。偵察隊の報告によればP一四二四の尾根のとっつき地点迄、サブで二時間かかったとの事。その上尾根の状態がわからず、雨による増水が心配されるので、下見で状態のつかめている東沢の方にコースをとることに決定。

七月二十三日　雨後曇一時雷雨

〈コースタイム〉　四時起床――六時三十分出発――九時東沢枝沢源頭――十時支尾根に出る――ブッシュ突入――家向山稜線へ出る――十四時高度一七五〇――十五時過ぎ窓明山頂

南――十五時四十分サイト地着――十九時三十分就寝

〈日誌〉 ブッシュ突入日。道行沢出合地点から南へ東沢を降りて渡渉すればすぐに旧林道が続いており二股の所迄はっきりわかる。南側の支沢より以後もしばらくこの林道が続いて、やがて一二〇〇m地点より沢詰めとなる。小さな滝や滑滝があるが、あっさり高巻きして、一二五〇m地点から北側の枝沢に入る。入口はわかりにくいが、少し行くと歩きやすい細沢となり、そのまましだいに傾斜をきつくして支尾根へ突き上げている。最後はかなり急だが、枝につかまりながら登って、一〇。一〇ようやく支尾根に上がる。靴にはきかえ、笹とかん木のブッシュを突き進み、二ピッチで家向山稜線にとっつく。そこからはしゃくなげ、つる、大木の混じったえぐいブッシュとなり、悪戦苦闘すること三時間。頂上迄は実に長かった。頂上のすぐ南は湿地帯が広がり、ようやくブッシュから開放され、ハイ松を背景に一枚パチリ。写し終ったとたん、今度は雷雨の襲撃。降り始めてすぐに激しくなりやがて、ピカッ、ババーン、ゴロゴロ……が続く。まともに囲まれたらしく四方八方から聞えてきた。しばらくたってようやく逃げていったが、これにはほとほと参った。サイトはこの湿地帯の地糖の点在している側に決めたが、水が上下から攻撃する以外は素晴らしい所。ここの水はまず、かれないだろう。

七月二十四日　雨時々曇

〈コースタイム〉 四時起床――六時出発――六時四十五分最低鞍部――八時四十六分三ツ岩とっつき――十時十分――高度一八八〇m――十三時十五分頂上――十三時三十五分サイト地着

〈日誌〉 最低鞍部迄所々に踏み跡がある。笹の急斜面でよくすべる。三ツ岩岳迄に小さなボコを三つ越えるが、二つ目を越した鞍部に大きな地糖があって晴れていれば抜群だろう。いよいよ最大難関の三ツ岩登りのブッシュ。急な笹の斜面を上り始めたとたん又もや激しい雨。よくすべる。続いてかん木と笹の混合ブッシュ。例によってめちゃくちゃなブッシュとなって一ピッチの移動距離は微々たるもの。とうとう三百m登るのに四時間半もかかってしまった。おまけに相変らずの雨とガスで、頂上直下の岩との分岐で、間違えて頂上へ行かずに巨岩の方へ行ってしまった。こうして一三・一五に三ツ岩岳の頂上に立つがむろん何も見えない。さらにブッシュをこいでいくと急にパカッと開けた所が三ツ岩田代。池の点在する気持良い所。あっさりここでデンと決めテントをたてたところへ、ひょっこり横浜国立大W・Vの混成パーティが現われる。小豆温泉から林道を通ってやって来たとか。

七月二十五日　晴後曇一時雨

〈コースタイム〉 四時起床――五時三十五分出発――七時P二〇五七手前――八時四十分最低鞍部――十時二十五分高度

二〇二〇m――十一時三十二分P二〇八九――十四時三分サイト地着

〈日誌〉 全体的に駒迄、檜枝岐側の稜線が湿地帯又は笹で割合歩き易い。サイトを出てすぐ前のボコをブッシュで抜けて下った鞍部は全体が美しい湿原。きのうサイト地を共にした横浜のパーティがすぐ後について来ていて皆しきりに気にする。すぐ向うにそびえるP二〇六〇も東側をまくが、かなりの急斜面で注意。それを越せばP二〇五七迄延々とブッシュが続き、時々ばったり湿地帯に出る。それを越すと最低鞍部迄スズ竹の下りが続く。いい加減うんざりする頃、鞍部の湿原に飛び出した。すぐ近くの斜面に雪渓があったので、ミルク金時としゃれこむ。腹をこわさぬ様、食ってすぐ百数十mの登りに入る。本日のメインエベント。一番えげつないブッシュで、又もや遅々として進まず。ついに途中で昼食となる。一年は荷も軽く、皆元気だが、二年三年の中にバテ出現。ピーク迄二時間もかかった。途中ところどころにナタ目、布きれ、かんぱん等のワンゲル産物があるが、ブッシュであることに違いはない。P二〇八九を過ぎてようやく踏み跡があらわれたが、尾根上は相変らずのハイ松と笹とかん木と石楠花のブッシュ。檜枝岐側をまくが、これもかなりの急斜面。特にP二〇九八手前付近はガサッとまっ逆さまに檜枝岐に落ち込んでいて危ない。皆連日のブッシュでくたくたに参った頃ようやく駒ヶ岳が眼前に見え出した。鞍部着一四。〇三あっさりここでデンとし、半日遅れの為、明日は駒より直接檜枝岐に下り舟岐川上流を目指す。

七月二十六日　雨後曇

〈コースタイム〉 四時起床――五時五十分出発――六時五十分駒ヶ岳頂上――八時三十分水場前（一六五〇m）――九時四十五分高度一一〇〇m地点――十時四十分檜枝岐――十三時五十分小沢倉沢手前――トヤス沢馬坂林道入口サイト地

〈日誌〉 駒ヶ岳頂上手前の湿地帯を後にして残る数少ないブッシュもあっさり完了。午前六。五〇終に駒ヶ岳へ飛び出した。完全にブッシュを抜けた喜びを胸に、頂上で写真を一枚。一年曰く、「もっとブッシュをやりたいな。」 気が一変にゆるんだか、皆、次々に大キジに立つ。雨とガスの為中門岳ピストンを諦め、真直ぐ檜枝岐に下る。昼前檜枝岐着。本部へTELし、デポを取って出発。重荷の所為で、ロード途中、二年がバテだした。全員がシャリバテになった頃、ようやくヤス沢着。

七月二十七日　晴

〈コースタイム〉 四時起床――六時十三分出発――七時五十分越の沢出合――十時四十五分稜線分岐――十二時五分台倉高山頂上――十三時五十分湿原サイト

〈日誌〉 舟岐林道は、舟岐川上流の黒沢右岸沿いについてい

て、越の沢分岐を越え、さらに火打石沢の方へと伸びている。越の沢分岐からの登山道は、沢の左岸沿いについていて、上の方は巾五〇センチ程の登山道だが人口がわかりにくい。皆バテ気味で、稜線まで六時間もかかる。この分岐で二Pの伝言を見た。元気らしい。台倉高山ピークで久し振りに展望を楽しむ。よく晴れていて駒の方も見える。感慨深げな素振りで、皆、しばし佇む。この頃より、一年某君の天才的な珍語が流行す。二時前に湿地帯着。あっさりデーンとし、連日の強行軍の疲れを癒す。

七月二十八日　曇時々晴

〈コースタイム〉　なし

〈日誌〉　幸か不幸か、休養日に抜群の天気となる。強い日射しと多くの虫とに囲まれてのタルミ・デー。前夜のアミダの結果、今日の食当には奇怪にも一年は一人も当らず、二。三年ばかりがやらせられる事と相成る。上の者、騒ぐ。「こりゃ陰謀だ！」ともあれ憩いの一日……カンバン将棋、紙トランプ、板碁が多いに流行った。

七月二十九日　晴

〈コースタイム〉　四時起床――五時二十五分出発――六時三十五分帝釈山――七時五十五分田代山着――九時三十五分田代山発――十時四十分帝釈山頂上――十一時五十二分テント場着

〈日誌〉　今日は帝釈　田代山系ピストンの日。サブザックでさっそうと出発。今日も晴れている。帝釈手前の最低鞍部まで、ダラダラの下り。鞍部にテン張り可。水もある。そこから帝釈山頂迄、風倒木を掻分けての急登が続く。山頂からの眺めは、朝日、駒の大磯を始め、遠くは日光連山、越後三山の雪渓迄が見える。唯燧ヶ岳だけがその頂きを厚い白絹で覆って尊厳さを保っている。一時間程で田代山弘法堂に着いた。ここから前方、見渡す限りの湿地帯で、澄み切った青空が池塘のお花畑を食っている。強い日射しが大湿原を映え渡らせ、可憐な高山植物が咲き乱れる様は、まさに天上の楽園と言う呼び名にふさわしい。我々はここで昼飯をとり、昼寝をし、散策をしてたっぷり楽園気分を味わって、再びサイト地へと帰途に着いた。

七月三十日　晴

〈コースタイム〉　三時起床――五時出発――六時二十五分槍枝岐分岐――七時三十分引馬峠――九時二十分孫兵衛山――黒岩新道巻き道――十二時十分鬼怒沼分岐――十三時五十分赤安山――十五時赤安清水――十六時三十五分小淵沢田代

〈日誌〉　今日は行動距離が長い為、三時起き五時デッパツ。引馬峠迄は稜線の西側を巻いている。峠は小川が流れテントを五・六張張れるが、とにかく穢い。黒沢より右沢を通って引馬峠へ

の道がある。サイト地を横切って少し南へ行き、西へ向けて孫兵衛山へ向う。左手に稜線沿いに来ている道を見る。俄然、風倒木が多くなって、越えたりくぐったりで歩きづらい。ようやく辿りついたところにくびれ田代への分岐有り。明大ワンゲルの青い四角の標識がある。黒岩新道に入り、黒岩山南側を結局二四〇度巻いて鬼怒沼ー尾瀬沼林道に飛び出た。道は赤安山ピークの北側を巻き、その下りで赤安平入口への分岐に出会う。更に下って、最低鞍部に赤安清水があった。ところがテントがやっと一張はれる程度の為、更に一時間程歩いて、小淵沢田代迄行きサイトした。全員バテバテで、貪欲なる食事合戦が展開された。

七月三十一日　晴一時雷雨

〈コースタイム〉　四時三十分起床――六時三十分出発――七時三十分尾瀬沼ヒュッテ前（本部へTEL）――八時三十八分ナデクボ道とっつき――十一時二十五分燧ケ岳頂上――十二時四十分熊沢田代――十四時十五分御池ロッヂ

〈日誌〉　ニッコウキスゲの咲きほこる小淵沢田代を後に、眼下に尾瀬沼を見下しながら長蔵小屋へ向かう。一面にガスが立ちこめる湖面にボートの音がこだましている。尾瀬沼ヒュッテで本部へ電話。合宿に入って初めて複数の女の子を見た。皆、あちこちキョロキョロしながら、木道を辿って行く。沼尻小屋も嬌声に包まれている。いよいよナデクボの急登に入った。一ステップ毎にどんどん高度をかせぐ。やがて、股間を通して真下の尾瀬沼が見えるようになればもう一息だ。えげつないスピードで皆ガンバル。終には、ファイト、ファイトの声が出る。頂上へ立った途端、天候急変し、あわてて御池へ下りかけたところ、ものすごい雷雨に巻き込まれた。激しい雨に加えて、すぐ近くに雷が落ちる。あれやこれやで無茶苦茶になりながら、ようやく御池ロッヂ横のサイト地に着いた。

八月一日　晴

〈コースタイム〉　五時起床ー六時三十分ー七時八分上田代入口ー九時二十分銀山湖分岐ー三条の滝ピストンー一一時三十分分岐発ー一四時小沢平「尾瀬口山荘」前キャンプ場

〈日誌〉　隣りの関東のW・V混成パーティの悩ましい声にじゃまされて全員もんもんとして眠れず。眠けまなこをこすりながらのデッ発。きのうとうって変った青空のもと、陽に映える上田代や横田代を左右にながめ、裏燧を頭上にあおいで進む。銀山湖への分岐でザックを置いて三条の滝へピストンする。不幸にも（？）あいにくの日曜日でたくさんのメッチェンに出会い、とまどうことしきり。高さ百三十、巾十二メートルの大滝も人の多さに圧倒されていた。

よどみなく流れる只見川に沿って銀山湖へ下る事、十三キロ。予定通り尾瀬口山荘の有料キャンプ場着。山荘のおばさんから山

菜をたくさんもらい、一同大喜び。

八月二日　快晴

〈コースタイム〉　四時起床ー五時四十分発ー六。一六平ケ岳登山口ー七時十分船着き場――八時三十分銀山平着ー八時四五分中荒沢（集結地）着

〈日誌〉　山荘の主人にお礼を言ってから、船着き場迄、ものすごいロードピッチで進む。途中からは競争となって、予定より二時間も早く着いてしまい、一番船に間に合った。

朝もやの中に深緑の表情をうかべて静まりかえる銀山湖。この湖上で今は亡き桑原孝一郎氏のご冥福を祈り、花束を投げて黙とうする。

九時前に集結地着。昼過ぎ二P到着。協議の結果、夜は合同ファイアーをやり、夜はミーティングで過ごした。

八月三日　快晴

〈コースタイム〉　十五時すぎ三P到着ー十五時半に中荒沢発ー小出駅前にて解散式

〈日誌〉　小出駅前の河原で解散式。三Pのどろまみれの姿がひときわ目立つ。みんなよくやった。何よりも事故者が出なかったのが幸いであった。過ぎし二週間の活動を胸に、みな明日からの活動に備えて去っていった。

〈反省〉

ブッシュ中のメンバー把握の難かしさを痛感した。歩いていても、前二人位しか見えず、前の方が先に行ってしまうと、どうなってるのやらさっぱりわからない。必ずS・L一人にコースリーの補助をやってもらったが、二人共よくやってくれた。この三日間にわたったブッシュそのものは皆快調にいったが、その後疲れが出たのか、活動のリズムが違ってきた。やはりより安全なブッシュ活動で、しかも楽しめるブッシュということになるとこれ位が限度ではないか。

天候の良さにはずい分助けられたが、雷だけは参った。二日目に窓明頂上近くで出会った折など、まともに雷雲に囲まれてしまってどうしようもなく、通過をじっと待っているだけであった。金属類を身から離す事等勿論だが、それよりも雷雨の接近にもっと注意すべきであろう。

集結地は不正解であった。それとファイヤーはやるならやるで最初からきちっと決めておかねば駄目だ。残念ながら今回はちぐはぐになって文句もあった。

企画段階をふり返ってみるに、一Pはやはり三年が企画面で出すぎ、為に二年の意欲が夏合宿よりはP・Wに向いてしまったところがあった様に思う。ともあれ、この一Pで半年暮した一年七人がどういう活動をこれから見せてくれるか楽しみである。

（岡本隆）

断想〝南会津の山にて〟

杉崎公俊

山行の最中にいろいろと人に会うというのはあまり好きではない。だから誰も行かないような知られざる山、開かれざる山を私は好む。独占欲が強いのか、それとも単なるひねくれ者にすぎないのか……。こんなことを考える同じ頭の中で高き有名な山々に対する憧憬も次第に大きく育っているのだ。それでもまだ素直にその憧憬に従えないのはひねくれ者の悲しさか……。

南会津の印象。それは我々が自然の中にズッポリと浸ったという感じである。しゃくなげと熊笹のブッシュをこいでゆくと次々と出現するあの夢のような高層湿原。霧のただよう湿原を、自然を犯すという罪悪感にさいなまれながらもひたすら前進を続ける我々。そんな山行のできる南会津の山々であった……。

行動食について…。アメ玉とかガンセキが使用されますが、私は、アメ玉には夏合宿以来非常なるところの恐怖心をいだいております。それというのも台倉高山にて私はアメ玉を口の中でコロコロいわせながら登っておりました。すると何かのひようしにアメ玉が喉を通過しようとしたのです。しかし悲しいことにアメ玉はすこしばかり大きすぎたのです。つまりアメ玉は私の喉にひっかかってしまったのです。〝目を白黒〟なんてものではなく、〝ああ、私はこのまま息をつまらせて……。〟と思った位です。この様な訳で私はアメ玉恐怖症に陥ったのであります……。

遠雷が聞こえ、雨のしょぼしょぼ降る中で、窓明山頂近くの湿原でサイトした時である。夕食もおわって、ろうそくを消してまもなく、〝ポポン、ポポン…〟という青竹を割るような連続音が低いがしかしはっきりとテントのまわりをとびまわる様に聞こえたのだ。パーティーのほとんどのものが聞いている。不気味だった。

福島県南会津郡伊南町小立岩。しとしととふる雨の中へ我々はバスからおりた。いよいよここから自分の足で歩くのだ。ちょっとした空地で体操をしながらリーダーをはじめ、メンバーの顔をひとつひとつみまわす。春以来おなじみの顔だ。1ピッチ目。右足がいたむ。こんなことでこれから二週間山行を続けられるだろうか……。合宿も終りに近づき明日は銀山湖で船に乗るという夜。ろうそくの光に浮かぶみんなの顔をみながら小立岩の時のことを想い出す。仲間というものを考え、また自分というものを考えるひとときである……。テントの外では燧ヶ岳が月の光に照らされ

輝いている。

山霧につつまれた稜線でブッシュをこいでいる時、ふと私は何に向かってこんなにもがいているのだろうと思う……。

2 パーティー（南会津）

〈期間〉 七月二十二日～八月四日

〈メンバー構成〉

P・L 杉田吉又（E・3） 佐藤浩司（T・1）
S・L 岡本耕一（T・3） 安井敏之（Σ・1）
S・L 吉田春陽（D・4） 植木 巧（T・1）
食・気 三原正哉（S・2） 森 哲男（J・1）
会・衛 藤田慈治郎（E・2） 明田米生（Σ・1）

〈企画と準備〉

一月下旬からのリーダー会で、夏合宿のもって行き方が、検討されて来て、夏合宿はパーティーの企画で行うという事が決り、第一回部会で、夏合宿の一年生のメンバー編入が発表された。地域については、それ以前から、二、三年のメンバーで、いろいろな、地域について話し合いが行なわれていたわけで候補地としては、南会津の帝釈山系が有力であった。五月の新歓以後は一年生も含めたメンバー全員で、細部にわたるコース検討が行なわれ、五月十一日に最終的なコースが決定された。前半は笹のセミブッシュ気味の道で、倒木もかなりあり、苦労させられると思うが、後半は、池塘や、お花畑のある広々とした展望のよい稜線コースである。このコースについての資料は、クラブでも以前に実際通ったこともあって、部誌などもかなり参考になったので、不明な所のみを、地元の役場、営林署、山岳会等への問合せを行って、コースの全体的把握を行い、六月上旬にはS・Lの岡本に湯西川方面の下見に行ってもらい、最終的な決定を行った。また3年のリーダーが2名しかいないので、4年の吉田氏に協力をお願いした。またパーティーのチームワーク、体力等については、三度にわたるトレーニング合宿と、学校周辺で行なった毎日のトレ、ザックトレ、予備合宿等の一連の活動を行うことによって、各人なりに自分の力を養成出来たし、それを通して、メンバー全体の実力も、かなり把握出来たように思う。

〈予定コース〉

七月二十二日 大阪■■急行瀬戸一号
二十三日 ■■上野■■浅草■■鬼怒川温泉═══湯西川温泉── 三河沢出合TS
二十四日 TS－日暮峠－万才小屋－弘法堂TS